

「文化」の現場を歩く

第7回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授

松本 茂章

静岡県島田市の 大井川川越遺跡

◆東海道一の難所・大井川

一級河川・大井川の東岸にある「島田宿大井川越（ルビ・かわごし）遺跡」（静岡県島田市）を東西に貫く川越街道には江戸時代の様子を復元した木造の建物群が並ぶ。近代的な電柱は建物裏側に特設され、常夜灯が設けられている。1948年以来68年ぶりの近距離に近づいたスーパームーンのもとで街道を歩きたいと思ひ、2016年11月14日の満月に現地を訪れた。しかし全国的に生憎の雨。翌



1856年（安政3）に建てられた川会所。川越遺跡のなかで唯一、江戸時代から伝わる貴重な建物だ

「しい」と頭を下げられたことがある。我慢して見せました」と笑いながら話し、「だれもが『いいなあ』とおっしゃってくださる」と誇らしげだ。川会所と複数の番宿は無料で一般公開されており、櫻

15日夜に再び訪問して巨大な月を見上げることができた。強い黄色の月明りに照らされながら散策すると、近世の宿場に迷い込んだよう感覚に陥った。

島田宿は江戸から京までの東海道五十三次のうち23番目に位置するのだが、7番目に大きかった。人口6727人。戸数1401軒（天保年間）。大規模だった理由は、江戸期の大井川に架橋が認められなかったからだ。川を越す時間帯も限られ、泊まらざるを得なかった。大雨が降ると「川留め」になり、長逗留も余儀なくされた。最長期間は1868年（慶応4）の28日間。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」とうたわれた。

往来する旅人は川越し業務を統括する川会所で川札を買ひ、人足の男たちに肩車されたり、輦台（ルビ・れんだい）に乗って担いでもらったりした。川値段（通行料金）は水深や川幅によって変動した。同遺跡そばにある市博物館の説明によると、今のお金にして、お殿様なら約8万円、庶民は8700円程度だったそうだ。ふんどし姿の人足が胸まで水に

つかりながら「ヨイト、ヨイト」との掛け声をあげた。市教委文化課主査の望月伸嘉（1970年生まれ）は「幕末に上洛した十四代将軍・徳川家茂が川を越した際には36人で輦台を担ぎ、水流を緩めるため50人が動員された。このころ、川越し人足は600人程度いたといわれた、地元出身者なので、雇用を生み出す地場産業でもあった」と話した。

◆復元された番宿

人足が一番から十番までの組に所属しながら交代で現場を担当した。溜まり場だった建物を番宿（ルビ・ばんやど）と呼ぶ。関係する施設跡20カ所および街道は1966年、文化庁から国の史跡に指定された。川越関連での史跡指定は全国唯一の存在だ。1970年以降、川会所、四つの番宿、立会宿、酒屋、札場、堤などの建物復元（修復も含む）が順次行われ、現在では指定地のうちの72%が市に買収されて公有化された。

木造で復元された番宿を自宅とする櫻井京治（1941年生まれ）は「京都から訪れた人に『自宅の内部を見せてほ

井は市から委託され、これらの建物の戸を午前8時に開けて午後5時に閉める作業を引き受けている。輦台越保存会（54人）会員でもある。

同保存会によると、江戸時代の輦台は川会所に8点残され、市文化財に指定されている。本物の輦台を用いて川を越す行事は2005年まで行われていたが、会員の高齢化や川床を整備する費用負担の重さなどもあって中断。櫻井も若いころ輦台を担いで川を越した一人。「ダムのできる前はずっと水量が多く体が流された。水の底はでこぼこになっていて転びやすい」と往時を振り返った。「ふんどし姿を嫌がって若い人が入会してこないのが心配。毎年のように川越し行事を続けないと、渡り方が後世に伝わらなくなる」と懸念する。

◆歴史的なまち並みを愛して

江戸時代にタイムスリップできる川越街道に熱い視線が注がれている。一級建

文化財保護とまちづくり

築士事務所代表の佐野正道（1958年）は同市に生まれ育ち、進学した法政大学工学部では都市と川の関係を考える授業を受けた。卒業後は東京で仕事をしてきたが、2005年、古里に戻ってきた。夫婦で暮らせる物件を探したところ、紹介されたのが川越街道に面した築100年の古民家。「東京育ちの妻が下見に訪れて一目で気に入った。『私はここに住む』というので契約した。畳がかびていて、とても住める状態ではなく、漆喰の白壁にするなどの大掛かりな改装をした」と振り返る。1999年に発足した川越し街道を愛する会（15人）の会長を引き受けている。愛する会は番宿に雛人形や七夕飾りを展示するなどの活動を展開。街道に面した市の観光施設・川越茶屋（約85平方メートル）の一角では土産物店を運営する。同会が行政財産の使用許可を得て、月額売上の5%を使用料として市に収める契約を交わした。民芸品のほか甘酒100円、江戸コーヒ130

0円。駿河風生姜紅茶は2000円だ。「新しいお土産を開発したい。何よりここは交通遺跡なのだから、人の往来を取り戻さなければ。川越し行事を何とか復活させたい」と語っている。

荷造り用縄を取り扱っていた荷屋屋の跡に1928年に建てられた民家の軒先では、2011年6月以来、農業の田村義之（1978年生まれ）が毎週土曜に朝市を開いている。市北部にある自らの農園で栽培した無農薬のお茶、濃い紫色のブルーベリー、自家製ジャムを並べる。「ファーマーズ・ダイレクトといい、農家自身が販売する。量販店と違って作り手の顔が見える。常連の方が増えてきて幸い」と笑顔で話した。田村はお茶農家の十三代目。東京農業大学を卒業後、衣服類の企業「ユニクロ」や介護福祉施設に勤務するなど東京で暮らした。「東京が光って見えて上京したが、田舎の良さに気付いた」と帰郷した。「懐かしい感じのこのまちが気に入っている。畳と板の間の和室空間が好ましい」。川越遺跡の歴史を知らない買い物客には丁寧な説明を心がけている。「愛着がでてきた。

ここに住みたい」と願う。街道で営業する店舗は四つ。もっと増えてほしいと希望した。

◆史跡指定から半世紀

国の史跡なので、土地買収や建物復元の費用は文化庁から補助金が出る。施設買上げは事業費の80%、施設修理は50%が補助される。おかげで修復できた川会所は木造平屋で間口六間半（10・9メートル）。幕末の1856年（安政3）に建てられた。明治維新後、2キロ離れた宿場町中心部に移築され、学校校舎に活用された。さらに村役場を経て、1937年に同川そばに移築され、記念館として使われた。史跡指定4年後の1970年、再び移築されて川越遺跡に戻ってきた。しっかりした部材なので重宝されてきた。「木材のほぞの組み方がよく分かる点が貴重」（市博物館）といい、街道のシンボリック的存在である。

史跡指定から50年後、新たな出来事があった。筆者が訪れた11月15日、市は、街道沿いの古民家の建物と敷地を買収する契約を交わしたのだ。同土地は現在の

川会所の50メートル東にある。江戸時代の川会所は同所に建てられていた。同遺跡保存を担当する先述の望月は「4・5年先には、川会所を再び移築して、今回買求めた本来の土地に戻したい」と言った。数奇な運命の川会所はこれで5回目の移転になる。

順調に推移しているかに映る遺跡保存だが、悩みもある。買収された市有地では、公的資金の補助を得たため商売等の営業に制限がある。同街道沿い建物が市有の復元建物ばかりになると、人が住めず、店舗もできず、ゴーストタウンになりかねない。文化財保存と街道に往來を取り戻す地域活性化策の両立をどうやって実現させるのか？ 難しい課題だ。文化課長兼市博物館長の孕石晃（1961年生まれ）は「川越し行事の復活を含めた観光開発が急務になってきた。全体のバランスを考えると、行政が遺跡全部を買収してしまうより、一定の民有地を残して店舗や民宿施設などの営業を促進していきたい」と話す。策定中の遺跡整備基本構想にも、まちづくり重視の姿勢を反映させたいと考えている。（敬称略）

